

[研究会報告]

第 34 回国際小児保健研究会報告

森 臨太郎 (世話人) ¹⁾

1) 大阪府立母子保健総合医療センター

第 34 回国際小児保健研究会は、平成 20 年 10 月 26 日に、第 23 回日本国際保健医療学会学術集会との合同企画ワークショップとして「Community における MNCH 改善—その可能性と限界を考える」と題して開催しました。

母性・新生児・小児保健 (MNCH: Maternal, Neonatal and Child Health) 改善への国際的な関心が高まる中で、適切な母性・新生児ケアへのアクセス向上を最も必要とする、地域 community への効果的な介入はいかにあるべきか、これまでの経験及び知見を共有して、今後の可能性と限界を協議することを目的としました。この目的に沿った情報共有と意見交換を行うことで、地域における MNCH 改善への取り組みの重要性が明らかになること、そして、総合討論では、そのようなアプローチの将来的な可能性や限界に関しても、参加者の認識が深まることが期待されました。

朝からの開催にもかかわらず、満員の聴衆を迎えて、世界で活躍する演者のみなさんから、興味深い、さまざまな視点からのお話とご討議をいただきました。下記に講演内容をお示します。

- ▶ 「なぜ Community-based MNCH が重要か？」
明石秀親 (国立国際医療センター国際医療協力局)
- ▶ 「マダガスカル地域における妊産婦・新生児ケア：efficacy から effectiveness へ」
松井三明 (国立国際医療センター国際医療協力局)
- ▶ 「ベトナムゲアン省における JOICFP の取り組み」
石井澄江 (JOICFP：家族計画国際協力財団)
- ▶ 「アフガニスタンにおける MNCH アプローチ—政策から Community まで」
藤田則子 (国立国際医療センター国際医療協力局)
- ▶ 「コミュニティにおける女性と子どもの健康改善のための科学的根拠の現在」
森臨太郎 (JICHA、大阪府立母子保健総合医療センター)
- ▶ 「母親と子どもの健康は自分たちで守る：Community の声に耳を傾ける」
中村安秀 (JICHA 代表、大阪大学人間科学研究科教授)

地球規模の大きな課題として残るコミュニティの母子の健康に対して、それぞれの地域での試みや、全般的な話から、共通して教訓として考えられることと、地域によって違うアプローチなど、今後私たちが途上国の現場や地球規模の政策現場で考えていくための知恵と方向性が見えてきたシンポジウムでした。この討議の余韻を文章として残すことができ、この報告がめでたい国際小児保健研究会の雑誌第一号に掲載されるのはとても名誉なことです。

この場を借りて、演者の皆さん、オーガナイザーの岩本先生、さまざまにご支援いただいた JICHA の皆様に感謝申し上げます。